

# 青少年育成センターだより

第187号 2024. 8. 1

防府市教育委員会生涯学習課

青少年育成センター

0835-23-3013



## 人の役に立つ喜び

前々号「青少年育成センターだより」で、伊集院静さんを紹介しました。  
今号でも伊集院さんの言葉を紹介します。

### 己以外の誰か、何かをゆたかにしたいと願うのが大人の生き方ではないか

かつて私は松井秀喜さんの半生を取材し、それをアメリカで出版したことがあった。

取材で得たものにはいくつもの輝くものがあったが、私が印象に残ったもののひとつに  
中学野球部の高桑コーチの思い出がある。

「中学3年の最後の試合が夏に終わって、僕は部室に置いていた野球道具を取りに行っ  
たんです。夏休みで、チームも数日休みになるんです。部室を出ようとする、誰もいな  
いはずのグラウンドにぽつんと人影が見えたんです。あれっ、誰だ？何をしているんだ？  
とよくよく見ると、監督が一人でグラウンド整備をしているんです。炎天下で一人っき  
り。そうか監督は毎年、こうしてたんだ、と思うと黙ってお辞儀をして帰りました」

監督曰く、「何でもありません。グラウンドを整備しながら、新チームはどんなふう  
にしたいかと思うんです。それに石コロひとつで選手に怪我をさせたくありませんから」

世の中は、目に映らない場所で、誰かが誰かのためにひたむきに何かをしているもの  
だ。

目を大きく見開けば、そんなことであふれている。今は見えずとも、のちにそれを知  
り、感謝するのだろう。己のしあわせだけのために生きるのは卑しいと思う。

「風の中に立てー伊集院静のことばー」 講談社

（伊集院さんは防府市の出身で、防府高校野球部の選手でした。そして、立教大学でも  
野球部に入部して厳しい練習を積んでおられたそうですが、2年生の時に肘を壊され、野  
球を断念されたのです。その関係からでしょう、みなさんが良く知っている松井秀喜選手  
と良い関係を築いておられたのでしょうかね）

伊集院さんは、「己のしあわせだけのために生きるのは卑しい」と言っておられます。  
人は誰もが、自分のしあわせを望み、生きています。当然のことでしょう。でも、伊集院  
さんは、自分だけのしあわせを望む生き方では、本当の豊かな人生を送れないのだと言っ  
ています。

今年1月に、能登で大きな地震がありました。被災され、大変な思いをされている人た  
ちのために何ができるかを考え、それを実行した人が多くいると聞いています。そのよう  
なボランティアとして活動をされた方は、人の喜びを自分の喜びに変えた人たちなのでし  
ょう。本当に素敵な生き方です。

今年、3月18日に東京で伊集院さんのお別れ会があった時に、伊集院さんにお世話に  
なったという武豊さん（騎手）の弔辞の中に次のような言葉がありました。「私が仕事で  
なかなか結果がでず、苦しいときに相談したことがあった。真面目に一生懸命に仕事をし  
ていれば、堂々としていいとおっしゃっていただき、本当に救われました」さらに、「大  
切な人を大切にしないで、立場の弱い人にやさしくなりなさい・・・」と。本当に伊集院  
さんらしい言葉で、私たちもかみしめたい言葉ですね。

青少年育成センター指導員 藤村